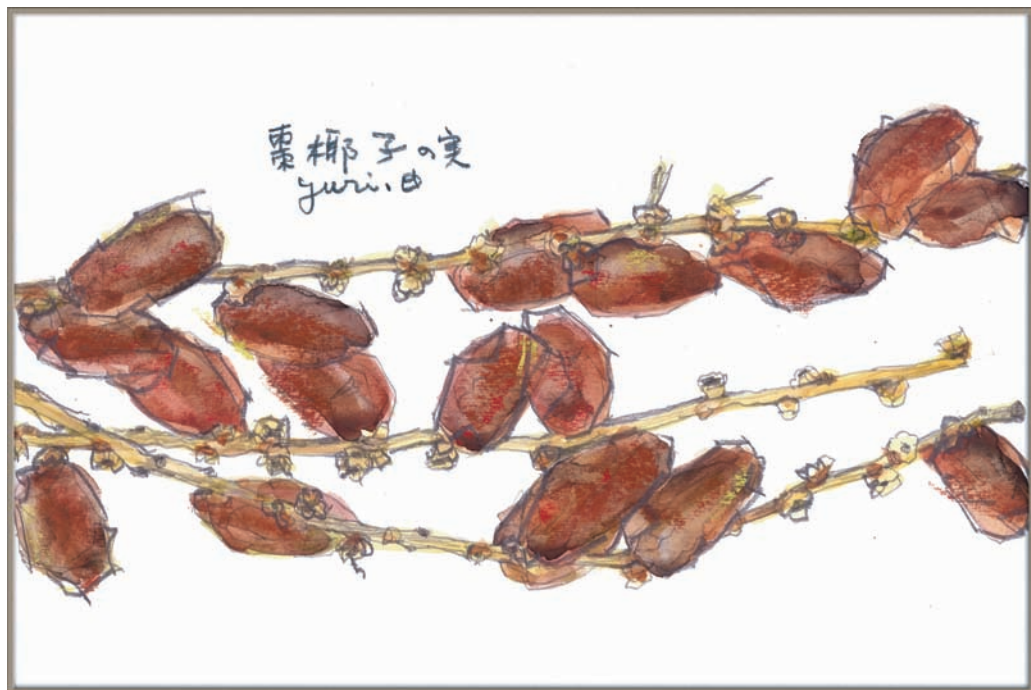


三河アララギ

平成二十二年

十二月号

第五十七卷 第十二号



ニューヨーク日記(50) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

September 10, 2010 : Eleven Madison Park

Blue Shoe Diaries



素敵なディナーに行って来ちゃいました！数年前にシェフが変わってからまだ行く機会のなかったEleven Madison Park、メニューの感じがとてもモダン。演出もとても楽しませてくれました。テーブルに座る前にキッチンへちょっとお邪魔して特別カクテル(写真に写っているのがそのぶどうのカクテル)！テーブルではアペタイザーが出てくる前に数々のアミューズが面白いしビックリ美味しい！ヤギのチーズのミニアイスキャンディーやピーツのマシュマロってモダンな技術で作られた物も出て来れば完璧に調理されたポークチョップも出

て来るととても良いバランス！ブラボー！こんな素敵なディナー本当に久しぶり！楽しかった～

Dinner at Eleven Madison Park. I knew it would be really good, but I didn't know it would be this outstanding! We started off by a visit to the kitchen where we had a specially concocted grape cocktail (that's what's in the picture). Then we were whisked away to the table where countless of whimsical amuses came out. A goat cheese lollipop and beets marshmallows just to name a few. Then beautifully presented dishes as we ordered from a simple menu where you just pick the main focus and leave it to the chef to cook it in the best manner. I really liked the balance of the mixed molecular gastronomy and a more classical approaches to cooking. Keeping the taste end experience as the priority. It was such an exciting meal!

目次

第五十七卷第十二号(通卷六八四号)

表紙(棗椰子の美) 今泉 由利 (一)	Blue Shoe(二)	推薦書	杉浦恵美子(二二)
ニューヨーク日記(50)	杉浦 弘(五)	多羅葉	堀川 勝子(二三)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より (四)	岡本八千代(六)	カーナビ	平松 裕子(二四)
歌集一本の木	白井 久吉(七)	白菜	山口千恵子(二五)
花かげ	今泉 由利(八)	神在月	小野可南子(二六)
曾孫来る	伊藤八重子(九)	結び松	夏目 勝弘(二七)
地球	半田うめ子(十)	浴衣	秋山 逸穂(二八)
オクラ	安藤 和代(一一)	明日	井村 喬泉(二八)
幸せを呼ぶ	青木 玉枝(一二)	ことよせ	佐藤 喜仙(三二)
先頭を	弓谷 久子(一三)	私の一首	和歌から派生した季語の本意(その五) (三二)
祈りつつ	金津 文枝(一四)	贈呈誌	物理学者と詩歌の世界(11) (三五)
御津川	内藤 志げ(一五)	鎌田敬止という人(四十八)	鮫島 満(三八)
夫の歌	清沢 範子(一六)	萬葉一葉(最終回)	今泉 忠芳(四〇)
どまん中	近藤 映子(一七)	「氷魚」のことから(119)	岡本八千代(四一)
木犀	伊与田広子(一八)	ことのはスケッチ(384)	今泉 由利(四二)
秋の気配	林 伊佐子(一九)	和菓子街道(50)	平松 温子(四三)
世界	胃甲 節子(二〇)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	(四四)
老後の安居	北川 宏勉(二一)		
故郷は			
悲しからずや			

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

こころよる君がたまもの伽羅炷かば枯れ枯れ陀兜囉よみがへりこむ

P
149

慣はしにわがたはやすくいひて診るこんなことではまだまだ死なぬ

P
150

歌集 一本の木

杉浦 弘

「光」

瞬間に人間の姿やきつきし石階の影も消えゆくと言ふ

あたたかき光の中に静まりぬ年立つ朝の遠山の色

凍てしままひとひとけざる庭土を夕べかへりてふむ堅き音

花かげ

蒲郡 岡本八千代

かぐはしくにほひただよふわがダチュラ秋再びの花の白妙

朝も昼も夜こそにほへそのま白垂れ花あはれダチュラゆれつつ

めづらしくわれはうとうとしてきたり今夜ははやく寝むとするか

高齢者はタクシー代が三割とかつひに申請す秋晴れのけふ

ともかくも二人共ども身の丈に合ひたる生活くらしせむとぞ思ふ

夕暮るる茜の中なりけふも鳴る西浦中学の下校のチャイム

還暦をはやくにすぎたる男子をのこをみな女六人集へり今宵は十三夜

集ひたる六人ともにただよへる香りの花のダチュラを知らず

六人が六人ともに中学時代「誰が好きだった」の声高くして

また君ら「美術が2だった4になった」声にぎはひつつこの十三夜

曾孫来る

新城 白井久吉

来週ひまごの金曜日には東京の曾孫来ると聞けばうれしも

この種を播きて育てて花咲くを見とどけるほど長生きせよと

わが庭に初めて今年実りたる小さきナツメを手の平にとる

不思議にも年の輪重ね九十の祝ひの金を両の手に受く

童謡にありし熊とりぢいさんの獲りたる熊は八百八十

この古き目覚時計の捻ね子じ巻けば今も正しく時を刻めり

食らふ物やうやく旨うまくなりたるを家族と共に喜び合へり

十年日記第二冊目を続けよわが前に出すありがたきかな

ところどころ空白はあれどかろうじて十年日記の終り近づく

車椅子に頼りながらも茄子を植ゑ西瓜を這はせ楽しめたりと

地球

東京 今泉 由利

いきいきとキラキラとして水色の地球に私の明りをともす

生物の造りし空気に覆わるる宇宙でたったひとつの地球

あと幾つ^{ゼロ}0が足らぬか実測に地球の上の太陽系ウォーキング

日常は棚に上げおくひねもすを天文学的数字に遊ぶ

白色の五弁の花に風ありき今日生け垣の黄のカラタチ

まどかなる月の光を両の手に一・三秒過去の月光

1・3秒過去となりし月光の次の光の次の光の

1秒に3億メートルゆくといふ越えゆくはなく光の速度

太陽の核融合の産物のニュートリノが通過してゐる

私を通過してゆきそしてどこニュートリノはどこまでゆくの

オクラ

豊川 伊藤八重子

兄を送り弟送りし野の路にぼきりぼきりと折る彼岸花

わが庭に今年も咲き継ぐ曼珠沙華黄色は御津師白きは夏目師

瑠璃いろの露草の道歩みつつわがかなしみを忘れんとする

紅蜀葵植こしよつきゑよと給ひし彼の人の病長いたつききをわれはかなしむ

紫を花蕊に秘めて花のさく娘の庭畑にオクラふた本

尖り実をみな空に向けオクラ生る婿どの培ふ小さき庭畑

ベランダの透明屋根に見えてをりふたつ三つつの青き瓢箪

枯色の蔓に未だ咲く朝顔をてのひらに愛づ清く澄む青

藤袴咲くわが庭に舞ひ寄りしアサギマダラを今年は見たり

南から北へと渡るアサギマダラ藤袴の花に静か静かに休む

幸せを呼ぶ

新城 半田うめ子

柿幾つ成りてゐるらむつつきをり小鳥のさへづり楽しかりけり

柿の木に小鳥のとまり夕暮れの月の輝やきしばらく眺む

静かなる雑木の中山鳩の鳴きてゐるなりさわやかなりぬ

夏みかん数多に成りて楽しかり青きなりしを眺めて居りぬ

眺めつつ信頼出来し友の言ふかつこうあざみ幸せを呼ぶ

幸せの友の庭にて咲きて居り青紫のかっこうあざみ

眺め居り静かなる庭にて夕暮れの杉林の上月の輝やき

今朝も又飲みてゐるなり味をよく賞を受けたる見代のお茶を

静岡の咲夢茶屋の味のよき鰻を食みつつ庭に花見る

時折りに蒔田先生から味をよく箱菓子を頂く楽しみて食む

先頭を

豊川 安藤 和代

列長き下校の児等の見え隠れ夕陽に映ゆる実り田の道

「このままの人生で終りたくない」と趣味に勤しむ友思ふ夜

孫のみな素直に育つ喜びよ夕餉の膳にと光る茄子挽ぐ

雨晴れて運動会の空高く万国旗の音さやかに聞こゆ

校旗掲げ五百余名の先頭を入場する孫涙にかすむ

お母さん聞いていますかあなたの娘の「開会の辞」のその名文を

茄子キャベツ白菜つづく畑中も番地は一丁目二丁目となる

新米に筆柿里芋まこも茸義姉の心の秋が届きぬ

玉葱の皮で染めたるブラウスは私の好きな秋色うれし

そつと耳を澄ませば聞こゆ秋の雨会ひたき人を偲ばせて降る

祈りつつ

伊丹 青木玉枝

祈りつつ辿り着きたる中山寺鐘の音ゴオンゴオンと響き

一人きて供へる香のほのかなる煙が寺庭流れ流れて

今年又わが鉢植ゑの蜜柑の木七つ稔りぬ黄金に光り

秋の陽のかたむきかけるコスモス園カリオンの鐘ききつつ帰る

伊丹の街高層マンション連らなりて日本家屋の面影のなし

道問えば「お元気ですね」とほほゑまれ何故か嬉しい秋日和なり

わが庭松まつよ奄美で無事であるかしら別れの酒を今はなつかしむ

定年となりたる息子になんとなく安らぐ思ひ吾も老いたり

久し振り親子二人で紅葉狩り箕面みのうの森は錦に包まる

あの歌もこの曲もまたなつかしい秋の灯火に昭和のメロデー

御津川

豊川 弓谷 久子

蝦蟇殿と我は名付くる一度も姿見せずに鳴く声の主

隣家の庭に青大将我が庭に蝦蟇住みてをり日々好日

父母を故郷をもつと語りませシヨートステイに明日は行く姉

咲き残る鉄線垣根にひとつありはや秋寂びぬ君のみ庭は

曇り日の夕ベダチュラの花香る先生を偲び友を憶ひぬ

要介護四より五へと進みたり酷暑の夏を生き抜きし姉

朝顔は秋の季語なり濃紫の花は小さく今朝も咲きつぐ

御津川を狭めぬし葦刈られゆく草刈機の音高くひびきて

幾年ぶりぞ川面の葦の刈られたり流れ清かの我の御津川

拘りも蟠りも捨てむ御津川のほとりに佇ちて御津山を仰ぐ

夫の歌

島根 金津 文枝

朝日新聞のおりおりの歌の夫の歌友は暗記し言い呉れ嬉し

歌に俳句碁並べの出来る友われを慕いくるる月一度の出会い

植木屋さん刈り込みたり金木屋佛前に供へ忽ち花はパラパラ

昆虫の好きな夫三人の子を昆虫採集に連れ行きし思ひ出

一人っ子の夫は私と結ばれ今十四人の親子十三回忌に

夫逝き四十九日過ぎ四国遍路へ三十六寺遍路の思ひ出

花も実も真赤霊峰大山のナナカマドに心晴れ晴れ

狐色より紅葉に移る枡水高原リフト鉄骨冬に設へて

故郷のわが家は霊峰大山が見ゆ広瀬へ嫁ぎ十分バスで

母が山で採りのめ茸うまに豆腐茄子を入れ甘い汁長男の思ひ出話

どまん中

豊川 内藤 志げ

なだらなる土手の露草のあおの花自転車押して登りゆくなり

もの凡て止りある様な窓の外畳に座る雨の夕ぐれ

鉢蒔きの白菜の苗植ゑ頃なりしとどの雨が鎮もりの中

泥^ぬ凜める畑に白菜の畝作る夫の耕運機はしだいに傾く

傘寿と喜寿共に祝はむ夫好む電車の旅のキップの届く

鞆置き着替そこそこに家を出るビニールを寄せむ雨の予報に

腰下し休む傍への小草に止るあかあかあかさきトンプ

高く舞ふハグロトンプに低く舞ふ真赤な一羽休む藪かげ

アララギの和菓子街道の酒饅頭島田の祭りに友と味はう

橋板にどまん中と書いてあり蓬萊橋を島田に戻る

木犀

春日井 清澤 範子

十月二日新聞とり込む時かすかに木犀匂ひ始むる

木犀の小粒はじきてオレンジの花香りをり南の方より

木犀の花芽はじきて今朝薫る幾度も門の木戸を開きて

八王子神社に植ゑある愛知博の記念樹吾の丈まで伸びる

賽銭箱の前はきれいに掃きあれど拝殿の屋根に落葉積れり

神社に座し身体休むる一時に小鳥のさへづり耳に涼しき

店に行く右手に広がる稲田には刈り取り済みてひこばえの緑

吾が行く店のお菓子屋は早ばやと銀杏紅葉の飾り付けあり

エレベーターに乗りホームに降りれば枕木の裾に薄は涼しくゆれる

幾回かの面接に耐へ勤めをり二ヶ月たちぬ娘の頑張り

秋の気配

名古屋 近藤映子

暑かろが雨が降ろうが早や九月半ば過ぎれば早き夕暮

まだ暑い三十度余りの日の続き夫の病院に吾は汗して

テレビ付け夫の左手と握手する穏やか夫の顔は嬉しき

久しぶりベランダ鉢の水やりに白玉水仙蕾をつけをり

昨日より又今日の夕暮れ早まりて少し淋しく娘の帰り待つ

わが夫よこの秋も無事に迎へ来しこのままこのままと願ひ

出張の帰り途中に立ち寄りし息子等共に夫を見舞ひて

家族皆夫のベッドを囲みつつ昔話に微笑む夫よ

神無月に入りて降り出す雨強し灰色雲は低く重し

秋晴れの朝中部空港飛び立ちて千歳空港に子等と降り立つ

世界

豊橋 伊与田広子

一生に行けずならむ異国の地テレビに見入る世界あちこち

一番に行きたき所ウィーンへ本場で聴きたしウィーンフィルの音^ね

バーンスタイン没後二十年コンサート夜更くるも忘れテレビに見入る

名曲は一種独特の曲想ありキャンリードも聴きて初めて知る

死後すたると云ひし人ありバーンスタイン作品も指揮も名声残らむ

百貨店夏服姿の売子らは真冬の服を売ってゐるなり

暑さ去り秋の日和になりたりて冬服出して着替へし今朝は

夜の更けて静寂に子猫の声聞ゆわが家を巡り鳴きてゐるなり

車には目には見えねど傷のつく猫の爪細く鋭きなり

猫飼ひて初めて知りぬ漱石の「吾輩は猫である」の面白さ

老後の安居

岡崎 林 伊 左 子

多種類の蔬菜作りも生活の一助いちじょとなりぬ老後の安居に

七十代まだまだ若しと借地畑にひもすがら働く吾の楽園

畑仕事あるから吾は救はるる呆け防止となる友達もゐる

期待あることも楽しき育成の野菜の成長を日記に残す

整然と玉蜀黍の並ぶ畑鳥追ふテープが秋陽に光れり

温室の如くにビニール包囲して挿し芽のトマトの初花が咲く

畑より帰る舗道に夕食を終へて散歩の友達に会ふ

山繭の抜け殻ひとつ秋陽あび蓑虫の如く雑木にたるる

枯木にて夫が作りくれし長き杖つきつつ登る茸狩りに

耳遠き吾に歯医者が肩たたたく合図のありて口をそそぎぬ

故郷は

豊橋 胃 甲 節 子

故郷は今日秋祭沁々と言葉に出だせぬ念ひがめぐる

強き葛の蔓のみ一面覆ふ道吾亦紅の一花も今年は見えず

強烈な雨に打たれし金木犀は無残に朝には散り果てにけり

低温となれば紅色淡くして酔芙蓉は暮れても淡き桃色

幾日か経て又同じ場所に来て吾を見てゐる蝦蟇愛らし

昨日今日静かに烟る秋の雨裏山にて競ひて蛙の鳴く声

朝々は囂しき迄に鳴き続く野鳥は大方鶉らしく

お隣は思ひ切り剪定すつきりと裏も表も明るくなりたり

幾年も幾年も行く事無きままに豊橋祭も記事を読むのみ

牟呂用水の森の団栗拾はむと楽しみ行けど一粒だになし

悲しからずや

東京 北川 宏 廸

十月の朝もなお咲く朝顔はジャカルタの孫の丹精の花

手紙書く妻が漢字を聞きたびにわれの惚け度が試されてゐる

いつとなく席譲らるること増えていや結構ですとお断りする

会議する机に並ぶおーいお茶それぞれ持ちで閉会となる

国政調査の職業欄に「無職」なく家事従事者となるのだらうか

目ざめゆく朝の意識のその中に今日書くことを書き上げてゐる

生きものの歴史のなかのわがいのちどこで何食ひ何殺せしや

たまさかに命を選ぶ側にをり五種類の牡蠣かき旨さを異にす

ワイキキに大きな夕日が沈みゆく天動説をわれ疑はず

政治家が政治屋となり最後には選挙屋となる悲しからずや

推薦書

蒲郡 杉浦恵美子

夏物を仕舞ひつつふとこの服を着ての授業はもうないのかと

我の他はだあれも居ない職員室突風時折書類飛ばせり

風に飛ぶ書類拾ひに行く時が気晴しになる残務の土曜

我が最後の大仕事なりと自らを励ましつつも溜息が出る

推薦文一字も言葉が浮かばずに溜息頬杖消しゴムの滓

なおざりに出来ないだけに推薦文なおさら書けぬ秋天蒼し

推薦書二十人分を仕上げたり暮れ行く雨の夕べ淋しき

組の子が我が後ろより追ひ着きて先生グッドジョブと親指立てぬ

若き頃教員稼業が嫌なりきかれこれ三十数年も前

親子ほど歳の離るる同僚を先生と呼ぶ職場また好し

多羅葉

豊川 堀川 勝子

明日は切る糸瓜の蔓につつましく今だ咲き継ぐ黄の花の愛し
明日の無き蔓の茂みにつつましく咲ける黄の花まこと愛らし
棚こへて軒に絡みぬ糸瓜の茎をさぐりて刃物を静しづ下ろす
空のボトルに糸瓜の茎の清清を挿して待ち待つこの二・三日
読み返す吾が師の歌集のその中に多羅葉ひと葉挟みてありぬ
その名さへ知らぬ稚拙な我なるに多羅葉の意味論し下さる
多羅葉に書かれしお歌に先生を偲べば自戒の数かぎりなし
ヨトウガの菌型の穴の数多ある豆の葉筆るよ畑に座りて
朝々に掃く砂利石の庭に落つ桜紅葉のいろいろの色
次々に遙かになりゆく友幾人会ひたきひとりに今日こそは会ふ

カーナビ

豊川 平松 裕子

女らしくなき品揃へと言ひし客しばし我が店に遊びゆきたり

生きてゐて欲しかったよと父に言ふ「目の眼」に温子の連載始まる

我がポストを素通りしてゆく配達のバイクの音の遠ざかりゆく

来る電車来る電車ごと指さして幼は我に路線名問ふ

ポスターの成田エクスプレスを言ひ当てて幼はひとり頷きてをり

幼子がハンドル握る一両の電車に乗り込む背をかがめつつ

カーナビは伊勢湾岸道に誘導す機械の指示に屈して従ふ

目的地の博物館の前に着くカーナビの指示を守り走りて

縄文の土器以来かと思ひ見る織部の器の幾何学模様

雨雲といふ名の茶碗の前に立つ名付けしは誰いにしへ人よ

白菜

豊川 山口千恵子

草塚を持ち上げ蕾伸び出づる稲田の畦の曼珠沙華

畦道に出で来しばかりの彼岸花並び立ちたり茎白しろと

垂穂する稲田にさやかに風渡る畦に列なり赤々彼岸花

田の畦に彼岸花植ゑ並べゐし媪の姿この秋に見ず

大楠の枝々さやげる木下陰無住の寺の彼岸花の群

選びつつ畝に白菜間引きゆく大きく育ちし一本残し

白菜の大きく育ちし方残し一本立ちに仕上げつつゆく

抜きとりし青菜忽ち萎れゆく白菜の畝間引きしてをり

育ち良き一本残して菜を間引く罪悪感など少し感じつつ

忽ちに刈田となれる田の原に白鷺一羽佇む朝

神在月

豊川 小野可南子

稲架がけと稲叢つづく刈田なり神在月の出雲をゆきぬ

屋敷森と屋敷内なる祖の墓とを守る出雲の人等のたつき

展示室まず一番に吾^あを迎ふ「無我」のわらべの汚れなき目よ

山裳を霧たちのほりゆくところ黒と白とのこの朦朧体

いつの日か共に見ようと約せしあなた姿なくともあなたと二人

五十年の前に撮りにし此処この場所に立ちて一枚の写真所望す

御本殿にまみゆることのかなはずも心あらたに柏手拝礼

松江城の急なる段梯子^{きだはし}のほりきて天主を過ぐる松を吹く風

綾とりの輪にせむと編む千尋鉤針かたく持ちてひたすら

カーラジオに聞きて私の知識とすエビチャ色とは葡萄茶が正し

結び松

豊川 夏目勝弘

岩代いわしろの無人駅の箱のなかキップを落して結びの松へ

梅を干す匂ひただよふ畑道を結びの松の標べにしたがふ

陥しむるは今に明日に絶ゆるなし皇子みこは岩代の地霊に祈りし

霜月の海風ただに受けながら罪人つみびととなりし皇子ゆきし道

結び松いしづみの碑の片辺の幼松植ゑ変へ植ゑられ幾世代目か

岩代も荒畑目にたつ願ひつつ結ぶ草根のあまりに多し

重おもと皇子のひかれ行きし道車の切れ間を小走りに横切る

藤白のみ坂に皇子は絞首されし熊野古道に小さき墓あり

供華供物酒のあるなり墓の前有間皇子は十九歳ぞ

黄菊白菊あたらしし手作りの箱に賽を落しぬ

「招待」

浴衣

東京 秋山逸穂

あさぼらけ昨夜の暑さ冷めやらぬ風は河原にとどまつている

焙煎の珈琲豆の放つ香に厚切りトースト半熟たまご

清き水とどこおりなく行く川に栃の葉落ちてやがて沈みぬ

沢水に青竹水筒欲しくなるペットボトルではどうもいけない

青年が浴衣に締むる角帯はベルトの位置に結ばれている

明日

東京 井村喬泉

本当に好きな人には言へないとナンパ好きなる友に酒注(く)む

ワイパーは悲しき音をたてぬぐひたりぐずぐず雨を降らす空を

愛犬は死すと友より知らせきぬ思はず我の犬を抱き寄す

人肌の恋しき心を制すべく羽毛布団に身を溺れさす

剃り残しなべて同じき場所にありなでつつ明日に思ひは及ぶ

『いじよせ』 (西浦公民館 いーはとぶ)

夕暮るるまじはいつせいに鳴きはじむ宵には宵に鳴く虫のゐて
この朝も学童らの通学の声きこゆ遠く住むわが孫も同じか
けふの日の入り陽に映ゆる飛行雲オレンジ色のま直に伸びゆく
続きたる今年の猛暑に耐え抜きしか彼岸花は今あかあかと燃ゆ
日本への出張了へて帰り行く息子としばし歩むセントレア
名月を仰ぎて今宵は願ひこめ西王母といふ菓子をそなふる

牧原 正枝
岩瀬 信子
三田美奈子
稲吉 友江
鈴木美耶子
吉見 幸子

「投稿」

伊藤 忠 男

つねならばキンモクセイの香る庭秋風はまだ空を見上げる
朝日受け黄金色に輝やけど人は言うなり貧乏草と

白井 信 昭

埋立地の空高くあり巨ひなる虹に向かひて朝の出勤

大津谷川のせせらぎ聞こゆ散策路「県民の森」はことごとく秋

「俳句」

家計簿の余白に一句良夜かな

植村公女

音立てぬ母の音あり秋真昼

秋茄子八百屋の愚痴を聞いてをり

過去なるを掻き乱したし秋思かな

一石

一瞬後過去となる今柿を食ふ

沈黙の過去の世界や彼岸花

秋澄むや富士屹立きつりつの遠景色

喜仙

秋うらら隣家の子吹くフルートの音

比良比叡琵琶湖の上に鰯雲

この路の果ては何処秋深し

皓一

軒先の柿色付くや一の酉

落栗の毬に集まる雨の粒

私の一首

散りてまだ間もなき黄色の名は知らずマンシオンへ続く敷石の上 青木玉枝

伊丹に移り四年の月日をこのマンシオンに暮らす様になり、これが終の住処すまかとして玄関迄の敷石の道は山茶花、木槿、芙蓉とアカメガシやツツジと四季を楽しませてくれる。この道が私の安らぎの場所として毎日の生活を送って居ります。樹々に次ぎ次ぎと花が咲き敷石に花びらの散るのを見て住み馴れた蒲郡の海がとてもなつかしいです。黄色の花が敷石に点々と散って居るのを見て、名も知らない花がとても愛しくよけて通りました。

嫁の植ゑし白薔薇次つぎ咲きたれば「母さんの花」と孫は名付けり 安藤和代

庭の片隅に薔薇が咲きました。忙しさに気づかなかった私に孫娘が知らせてくれました。思えばいつか嫁が小さな苗木を植えたものです。しつかり枝を伸ばし淡い白色の花です。孫はそっと手をふれています。かすかに甘い香りがし花の枝には三つの蕾がついています。まるで嫁が三人の子をしつかり抱く様に。私は胸が熱くなりました。その時「母さんの花だね」と孫が言いました。「母さんの花」はずっとずっと咲き続けてほしいです。

一年を待つ日々長し盆帰省の君待ちわびしも遥かなりけり 胃 甲 節 子

治る希望のない癌とゆう病を得て前途に目標を持つ事が出来なくなり、遥かな日の遠い記憶に涙したり想いを巡らせたりして刻を過す時間が多くなりました。仄かに切ない恋心に胸を熱くした遥かな日、遠い勤務地よりお盆には必ず帰省されるお姿に、切なくも胸をときめかせたあの若かりし日々が想い出されて、ほろ苦い想い出となっています。齢や苦しみを忘れて一刻を遥かな日に心を遊ばせて詠んだ恥ずかしくも、切ない一首です。

梅雨の日の雨のち晴れの今朝の畑茄子むらさきにトマト赤々

山口千恵子

雨の日は何となく鬱陶しい。梅雨の雨が降り続いた晴れ間の畑を見に行くと、植付けた野菜苗もいきいきとしていて、一日見ぬまに、それぞれの本来の姿に、美しく輝いていた。

自然界のものはすべて美しい、木の葉も、作物を邪魔する草々さえも。茄子の実も大きくなって、つやつやした紫色が目に入った。トマトも赤く熟れたいくつかが目に入った。不断見なれた物が新鮮に感じられた。感謝の気持ちと共にそれを挽ぎ取った。

大鹿村山また山を登りゆきヒマラヤの青きケシ梅雨の晴れ間に

山本恵子

ヒマラヤの青いケシを初めて見たのは万博の時でした。一五〇〇メートル以上の高地でなくては咲かないそうです。二時間程かけて細い山道を登ってやっと着きました。そこで栽培されていたのですが畑に植えられていてがっかりしました。山の中に自然に生えていた方がよかったです。本物とは少し異なるようです。来年度の苗も植られていました。

吟行会へ御津山山道登り行く緑真深き夏木立の中

弓谷久子

御津山の麓、御津川の辺りに永く住みながら登る事の無かったこの山道を八重子さんと一緒に裕子さんの車に乗せて戴いて登りました。私の短歌生活で二度目の吟行会でした。あの日も新参者であった私は只先輩の八重子さんを頼りに歩いて行きました。

久々の先生方や歌会の仲間達、新しくお逢い出来る方達を胸に描いて登って行く。梅雨の晴れ間の御津山の緑の木下、本当にいい思い出をありがたうと言う気持ちでいっぱいです。

和歌から派生した季語の本意（その五）

「笹」同人 佐藤 喜仙

12 初雪

「都にも初雪降れば小野山の真木まきの炭竈すみがまたきまささるらん」

相模（後拾遺集）

「さむしろの夜半の衣手さえぐて初雪しろし岡の辺の松」

式子内親王（新古今集）

近頃は暖冬で平地では年内に雪の降らない年が多いが、四十年ほど前迄は東京にも十一月から十二月にかけて降雪があったものである。平安の都、京都においてはなおさらであったろう。その様子は「相模」の歌によって知られる。もちろん高山の山頂には既に冠雪があり、冬はまちがいなく来ているのである。

例句

初雪や松にはなくて菊の葉に

北枝

うしろより初雪降り夜の町

普羅

はじめての雪闇に降り闇にやむ

節子

13 枯尾花（枯薄・薄枯る・尾花枯る）

「朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄形見にぞ見る」

西行法師（新古今集）

「霜枯の尾花ふみわけ行く鹿の声こそきかねあとは見えけり」

後鳥羽院（百首御歌）

穂も葉も枯れはてた薄を言う。原一面の薄の穂が白くほうけて、冬の日には輝く景色はなかなか美しい。穂はふさふさとして獣の尾のように見えるので尾花の別名もある。関東地方にも薄原は多いが、中でも箱根の仙石原の薄原は著名である。

例句

枯くへて光をはなつ尾花哉

几重

枯芒ただ輝きぬ風の中

汀女

枯すすき海はこれより雲の色

静塔

14 行く年（年歩む・去ぬる年・年逝く）

「ゆく年の惜しくもあるかなます鏡見るかげさへに暮れぬと思へば」

紀貫之（古今集）

「ゆく年ををしまの海人あまの濡れ衣かさねて袖に波やかくらむ」

藤原有家（新古今集）

一年の歳月を惜しみ振りかえるような気持が込められている。同じような季語「年の暮」よりも主観的要素の強い季語で「春惜しむ」「秋惜しむ」等季節の移ろいを惜しむ言葉と同様、年の逝くに当りその年のあれやこれやの出来事を思い出し、惜しむ心と言う季語である。

例句

七十の暮行としぞつれなさよ

杉風

行く年やわれにもひとり女弟子

木歩

行く年の木に残りたる栗のいが

欣一

贈呈誌 十月号

「冬雷」

押野とめ

ひそやかに蔓からませて竹垣に音符のやうに昼顔咲きぬ

「秋楡」

山田幸子

「柶」

川波堯子

駆け寄るも切れし電話はいすこより雨のひと日のこだわり続く

海水に混るしばしをきらめきて大聖寺川ここに終りぬ

「愛媛アララギ」

國松幸枝

「榿の木」

荻野敏音

開け放ち先づはゴーヤの緑見て深呼吸する一日の始まり

体調が戻りて来しか裏畑の草が気になる梅雨あがるらし

「鹿児島アララギ」

千葉源治

「群山」

寒河江巖

熊蟬の高鳴く声のする朝は今日も酷暑の晴となるらし

真直ぐな太きアスバラに出会ふとき身を乗り出して鍔を入れぬ

「滋賀アララギ」

稲垣澄子

「穂の原」

大谷登美子

桐の実の青き房垂るバス停にひとり待ちをり桐を見上げて

こんもりと松の根方に杉苔が雨の上がりてつややかに映ゆ

「高知アララギ」

大野源治郎

神谷叔子

軒下を突き行く杖に散らばれる淡きみどりの蛙稚し

街路樹の並み立つハナノキ大方は紅葉に非ず枯葉となりぬ

「灯」

宮崎緑子

今村たかの

素麺をガラスの鉢におよがせて音たててすする独りの晝餉

わが田にて稲のみのりぬ畦道に蝗あまた飛びはねてをり

物理学者と詩歌の世界 (11)

一石

「R・P・ファインマン」

リチャード・P・ファインマン (Richard Phillips Feynman, 1918-1988) はユタヤ系アメリカ人の理論物理学者。マサチューセッツ工科大学で物理学を学ぶ。

その後プリンストン大学の大学院生となり、J・ホイラー教授(参考資料1)の助手を務める。コーネル大学を経てカリフォルニア工科大学の教授。

ファインマンの物理学における貢献は広範に渡る。とりわけ素粒子の反応を図示化する技法(ファインマン・ダイアグラム)は素粒子論における複雑な計算を理解し効率よく遂行できる画期的なものであった。また経路積分という新しい量子化の手法を考案し、それにより水素原子に見られるエネルギー単位の微細なずれ(ラムシフト)をみごとに説明した。1965年、量子電磁気学の発展への寄与により、朝永振一郎、J・S・シュウィンガーとともにノーベル物理学賞を受賞した(参考資料2)。

その他、液体ヘリウムの理論に関する仕事、弱い相互作用の法則を発見(M・ゲルマンとの共同研究)、陽子のいくつかの性質を説明するパートンの理論(後に量子色力学へ発展)、相対論(重力)と量子論の統合など物理学の広範な問題に独創的なアプローチで取り組み貢献した。量子力学におけるエネルギーの期待値を計算するためのファ

インマン・カツツの公式は、後に金融工学などの経済の分野にも応用されている。

ファインマンは物理学、化学、生命科学などの諸分野が複合的にからむ学際的な領域のナノサイエンスにも「ナノスケールの世界に新しい科学技術がある」と早々(1965年)と予言し当時の科学界に大きなインパクトを与えた。彼の予言はまさに現在実現されつつあり、21世紀の最重要な科学技術として注目を集めている。

1985年には量子コンピュータの可能性を論じている。この年、3回目の来日を果たし学習院大学で「量子コンピュータ」について公演した。腹部の癌の手術を受けた(1978年、1981年)後とは思えない、身振り手振りと言葉豊かなものであった。ファインマンの肉声に接することができたのは筆者の忘れぬ思い出である。

ロスアラモスでの原爆開発プロジェクトで「マンハッタン計画」へも要請されて参画した(参考資料3)。このころ余命いくばくもない最初の妻アーリーンと結婚(4年後アーリンは結核で死亡)、後に「Infinity(無限の愛)」のタイトルで映画化された。1986年に起きたNASAのチャレンジャー号事故に際しては、調査委員の1人として参加、事故原因の究明に重要な貢献をする。

代表的な著書には、カリフォルニア工科大学で行なった講義の内容をもとにして構成された物理学の教科書「ファインマン物理学I~V」(参考資料4)がある。これは分かりやすさと読者を惹きつける軽妙な語り口から、物理学への入門書として世界中で高い評価を受けた。

ファインマンはE・シュレーディンガー、W・ハイゼンベルク、N・

ボーアなど哲学者を髣髴させるヨーロッパの物理学者とは異なり、底抜けに陽気で「愉快な物理学者」と謂われ多くのファンを惹きつけた。ボンゴドラムをたたき、油絵を描くなど多趣味でもあった。名言もエピソードも小ネタもロマンスもてんこもり。そのあたりは『¹冗談でしょう、フラインマンさん』(参考資料²)など自伝・エッセーに詳しい。

フラインマンの名言をいくつか。

○「おまえ頭おかしいんじゃないか。(You must be crazy)」フラインマンは誰に対しても、おかしいものはおかしいと言えるタイプだった。これは上司に向かって発した言葉。

○「2度死ぬなんて、まっぴらだよ。全くつまんないからね。」(I'd hate to die twice. It's so boring.)

○「本当にわかった」と思うのは、物事に2通り以上の説明が出来た時だ。

○「私は自分に作れないものは、理解できない。」彼が亡くなった時に、黒板に残されていたという。

○「一番のルールは自分自身を欺かないことだ。そして、一番欺きやすい人間はあなたである。」

○「私が言わんとしているのは、嘘を言う言わないではなく、科学者として行動しているときは、あくまで誠実に、何ものもいとわず誠意を尽くして、諸君の説に誤りがあるかもしれないことを示すべきだということです。」

○「宇宙なんてグラス一杯のワインにすぎないのさ。」A poet once

said "The whole universe is in a glass of wine. We will probably never know in what sense he meant that, for poets do not write to be understood. But it is true that if we look at a glass closely enough we see the entire universe. (参考資料²)

○ You think I'm going to explain it to you. Can understand it? No, you're not going to be able to understand it. You see, my physics students don't understand it either. That is because I don't understand it. Nobody does.

「量子電磁気学」について市民向けの公演を行ったときの一言。産みの親の一人として他の誰よりも深くそれを理解しているフラインマンが、その本質が「自分でもわからない」と述べている。彼が「わからない」というとき、実は奥深いレベルで問題を提起していたのである(市民に向けて)。

参考資料

- 1) 三河アララギ、p 36、第57巻 第7号(2010)
- 2) 出典:フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 3) 『冗談でしょう、フラインマンさん(上・下)』
『困ります、フラインマンさん』
『聞かせてよ、フラインマンさん』
『科学は不確かだ』(以上、いずれも岩波書店)
- 4) 『フラインマン物理学 I-V』、岩波書店
- 5) http://en.wikiquote.org/wiki/Richard_Feynman

鎌田敬止という人（四十八）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（10）〉

この後すぐ、光太郎は鎌田に手紙を送り、

出版いろいろたくさん御計画ですがどうか実行の方の事も考へて下さつて損をせぬやう願ひます。エルハアランのものがどの程度世人に要求せられてゐるか小生には分かりません。「天上の炎」、「明るい時」は悪い本とは思ひませんが。おかりになつたら一応どの本も校正を一度見せて下さい。

（昭和二十一年十二月三十日付）

と、もう鎌田が出版にとりかかることを認めている。

しかし、『天上の炎』が出版されるのは印刷にとりかかつてから四年半後の昭和二十六年四月のことである。この間の事情を書いたものを見ることはできないが、次に示す鎌田の光太郎宛の手紙によつてあらまは想像できる。

○ヴェルハアランの「天上の炎」の翻訳権取れるやうに努力してゐ

ます。「明るい時」もです。これも来年の大いなる楽しみにいたしたいと念じてゐます。

（昭和二十四年十二月十九日付）

どうやら翻訳権取得の必要に迫られていたらしいのである。光太郎のメモ「通信記録」に、「鎌田敬止氏よりテカミ^マ及書類（「天上の炎」関係の届出等）」（昭和二十五年五月二十四日付）の記述があるが、それは、鎌田の次の手紙のことである。

二月二十一日に脳貧血を起したのが初めてで、それから時々やるので安心して外出もできなくなり、女房は三月の一日に発熱、胸をやられましたので、今だに一日おきにお医者さまが来てゐます。（中略）その間にただ一つ「天上の炎」の翻訳権の取れましたことは大変うれしくございました。最初、山内義雄氏が翻訳許可申請書を御自身でタイプライターで打つて呉れましたが、それをフランス著作権事務所に提出して、四月二十六日に契約が成立しました（フランス著作権事務所の代表者はレオン・ブルウ氏です）。（中略）これから翻訳発行企画届（二通）を提出して進駐軍CIEの許可を受け、文部省に翻訳権の登録をするのださうです。（中略）さて、天上の炎の印刷用原稿は終戦後に発行のお許しを得ました時に新しき村版から筆写したのがそのまま取つてありましたので直ぐ役に立つことになり、既に数日前に印刷所へ入れましたから近く校正がはじめるこ

と思ひます。(中略)序文は新にお書き願ふつもりで印刷所に廻しませんでした。(中略)それか岩波の世界文学講座にお書きになられたエルハアランの伝記を巻末に入れたらどんなものでせうか。

(昭和二十五年五月二十四日付)

そして欄外に「○企画届ニ通別分でお送りします。訳者の記入欄に御記入御捺印願ひます。」と書き加えている。ここに書かれている書類一式を私はこのたび発見した。それは四通からなり、一は鎌田とレオン・ブルウ(フランス著作権事務所代表)の間で交わされた契約書、二は光太郎と鎌田との間に交わされたもの(「連合国最高司令官が許可ヲ与エタ契約ニ基イテ白玉書房ハ高村光太郎ト契約ヲ締結シ、此ノ契約ニ基イテ高村光太郎ハ昭和二十五年五月二十八日『天上の炎』ノ翻訳物ニツイテ存スル著作権ヲ白玉書房ニ譲渡スル」)、三は文部大臣天野貞祐に提出したものである。これについて鎌田は、「文部省著作権室に行き提出しておきました。和英両文で官報に出ます由。登録申請の文句なども随分妙なものです」(昭和二十六年五月二十八日付)と光太郎に知らせている。そして四は「『天上の炎』の内容梗概」で、そこにはこう書かれている。

一九一四年独乙軍ガ白耳義ニ侵入シテ以来エルハアランハ故国救援ノタメ東奔西走シタガ、一九一六年過ツテ斃死シタ。此ノ詩集ハ死ノ直後出版サレタガ、大戦前ニ書カレテ居タ。「未来ヲ愛スル人人へ」

トイフ献詞ガツイテ居テ、近代生活ヤ自然ヲ賛美シタ詩ヤ、死生ノ哲学ヲ歌ツタモノナド総テ廿五篇、未来へノ信仰ト意力ガ全巻ニ漲ツテ居ル。

こうして『天上の炎』は昭和二十六年に発行されるが、それに先だち、鎌田は光太郎に、紙が高騰していることを書き、次のように知らせている。

天上の炎はブルウ氏との契約で一年以内に発行しなければならぬことになつておりました。その一年は四月廿六日に迫つておりましたで、かなり慌てて紙を探しました。だが思ふやうに良質紙は求められませんでした。おまけに装釘も誠にお粗末で甚だ恐縮でございますが、何もかも病後の非力のためとお許し下さいますやうお願いいたします。(中略)○天上の炎がよく売れましたら、今度は「明るい時」と「午後の時」と一緒に一冊にして出したいと思ひます。これは詩歌文庫に入れたらと思ひます。

(昭和二十六年四月二十三日付)

満足できないものながら、『天上の炎』は昭和二十六年五月に発売される。手元にある初版本の帯には大字で「翻訳権取得」とある。そのことを鎌田が光太郎に知らせた手紙は次号に紹介する。

萬葉一葉（最終回）

今泉忠芳

仁徳八十七年春・一月、仁徳天皇崩。

磐姫その二十五 表記・年譜・陵

磐姫皇后の表記

磐姫皇后の表記は萬葉集、古事記、日本書紀ではそれぞれ異っている。

萬葉集 磐姫皇后

古事記 石之日賣命

日本書紀 磐之媛命

奈良市佐紀町の磐姫皇后の陵・平城坂上陵には宮内庁の立札があり、そこには「磐之媛命」と記されている。

本項では各出典の項においては、各出展の表記を用いている項もある。

磐姫皇后の年譜

日本書紀・仁徳天皇紀の年譜に磐姫皇后の年譜を当てはめてみる。

仁徳二年春・三月・仁徳天皇即位、磐姫皇后立后。磐姫皇后20才（仮定）、(342)。

仁徳二十二年春一月・八田皇女の入内について、仁徳天皇と磐姫皇后との志都歌（磐姫皇后40才）。

仁徳三十年秋・九月十一日、皇后紀の國、熊野岬へ行かれ、三つ柏を取ってお帰りになった。留守中、八田皇女入内と聞き、皇后、山背筒城宮へ。磐姫皇后48才（370）。

仁徳三十五年夏・六月、皇后磐之媛命、筒城宮にて薨去。53才

(375)。

女鳥の王と速総別の王の件

古事記と日本書紀とではこの件の扱いが異っている。古事記では「皇后様の嫉妬の強さのために、八田若娘女をも思うようにおできになりませんですから」と云って女鳥王は仁徳天皇の申入を断っている。この記事は磐姫皇后の健在を示している。日本書紀では女鳥王と速総別の王の件は、磐姫皇后没後の記事となっている。

平城坂上陵

磐之媛命の陵墓である。

奈良県奈良市佐紀町、小奈辺古墳、水上池の北にある。

日本書紀には次の様に書かれている。

三十五年夏六月、皇后磐之媛命は筒城宮でなくなられた。

三十七年冬十一月十二日、皇后を奈良山に葬った。

日本書紀の記事の通りの場所に平城坂上陵はみられる。

宮内庁管理の陸墓である。

仁徳天皇皇后磐之媛命

平城坂上陵

一、みだりに城内に立ち入らぬこと

一、鳥獸等を取らぬこと

一、竹木等を切らぬこと

宮内庁

「氷魚」のことから (119) 岡本八千代

まっ白な百合に似た花、私のダチュラが秋になってまた咲き出した。その香りの漂いくる中で、「氷魚」の稿を書くこととする。幸わせなにとだどつくづく思う。

昨夜は、TVで南米チリ・サンホセ鉦山落盤事故の「奇蹟の生還」を観た。——三十三人のその命の神がかり的な救出に私の思いは尽きない。一人一人の欲望を制えて、三十三人が心をひとつに協力して、わずかかもしれないという命の不安をだんだんと生きるという強い希望に変えていった。そのプロセス。私には神秘としかいえない感動だった。たとえ、科学の力が加わったとしても。

さて、ここからは子規の小説「銀世界」の第四(前回のつづき)

「われ」と出会った、ひとりの女は、四・五歳の男の子をつれている。そのおつかさんとほうやは、おっとさんに会いにゆこうとしている。ところが、母親は癪が起つて歩けない。……そこへ、二挺の駕籠かきが来る。駕籠に乗っていた五十許りの老人は、女に近寄り、印籠より薬を出して、雪をとつてこの母親に薬をのませた。その老人は帰つていったが、今一つのかごに若い男が乗っていた。ここでまた、女と男の出会いがあった。——かごやの歌、

ままにならなら手に手を引いて引いてゆきたい銀世界——。

第五(銀世界 P 58)

ア 風流人の雪——俳句二句

雪の日や枯れ木も花の一盛り

大雪やあちらこちらに富士いくつ
商買の雪

・もしもこの雪が塩ならいいが、塩なら売れる
・もしも綿でもわるくないや

・この雪が三日も続いたら兵糧ぜめだ。

大雪や玉のふしどに猪ごへ

ウ 書生の雪 (俳句のみ抜粋。 P 59)

竹の雪ふるひ落すやむら雀

エ 官吏の雪

雪ふりや源左衛門は大もうけ

オ 親の雪：親として子を思う雪

雪の日やあれも人の子樽ひろひ

カ 権妻の雪 P 61

雪の日や炬燵の上に眠る猫

キ 芸者の雪 P 62

「わたしやいやだよ西洋館は隣の家からガラスごし」

ク 領域の雪 P 62

雪ふるや折角さいた冬牡丹

ケ 骨稽家の雪 P 63

ふんで行く東方朔の雪のあと

コ 百姓の雪 P 63

豊年のみつぎの雪か銀世界

子規自筆稿。明治23年1月の作。ここで「銀世界」は終わる。

ことのはスケッチ (384) 今泉由利

『アミノ酸』

「水」、「コラーゲン」。少しづつ…自分なりの納得をしながら、「生命の誕生」に参加していたい。

今度は、生命に不可欠の存在の「アミノ酸」を知りたくなった。

この頃、アミノ酸は、美容や健康や…よくでてくる名前で馴染みになっていく。

そのアミノ酸は、生命そのものを生み出す物質であり、すべてのタンパク質の基本構成単位。二十種類のアミノ酸の分子の繋がりがり方によって、さまざまな特徴のタンパク質になるといふ。

雷や隕石の衝撃、海底の熱水噴出孔の熱、大気中でもアミノ酸ができること分っている。

分子雲中の分子の水、一酸化炭素、メタノール、アンモニア…などに、宇宙線や紫外線が当ることにより、種々な有機物が生成される。

五億年前の三葉虫の化石からアミノ酸が検出され、隕石の抽出物からも多種類のアミノ酸がみつかり…生命のものは、宇宙と地球と一体であることがわかる。

一九五六年代、ユーレイ博士とミラー博士は、無機物から放電により、アミノ酸を含む有機物を生成することに成功したが、タンパク質が出来るアミノ酸の、生命に役にしたつタンパク質は、あまりにもわずかであり、どのような反応があつて、生命を生みだせたのか、まだわ

かっている。

放電とか雷とか…思い出した。幼い頃から雷鳴、線光、稲妻、稲光り…激しいこと、美しいこと、たまらなく好きだった。

祖父母が蚊帳をつつたり、雷除けのまじないの短冊を箒を使って天井に張つたり、「くわばらくわばら」ということもおもしろかった。

雷鳴は、放電の際の空気が膨脹し、音速を越えた時の衝撃波で、落雷、放電により稲穂が感光することで豊かな稔りになるといふ。

「稲の花が咲く頃稲妻が多い年は、お米が豊作になること、おいしいお米になること」雷に夢中な私に、母が教えて下さつた過去。

雷の空中放電により、空中窒素が分解され、雨水により地中に溶け、植物の成長に欠かせない。

窒素とは、タンパク質、アミノ酸の主要元素にして空気中に約七十八%もふくまれている。アミノ酸をはじめ、多くの生物の必須元素。

人が肉類、穀物などを食べると、そのタンパク質は二十種類のアミノ酸に分解され、体内でまた体タンパクに組み換えられる。そのとき、十一種のアミノ酸は他のアミノ酸から体内で合成し、補うことができる非必須アミノ酸。他の九種のアミノ酸は食物より摂取しなければならぬ必須アミノ酸。

雷のエネルギーの凄まじいこと、物凄いものをもたらしているに違いないこと。

宇宙も想い出も、何一つ切り離すことのできない命のなりたち。一つの命として生きていることを、しつかり味わいながら。

和菓子街道 (50)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

池鯉鮒の次は、有松絞りで財をなした豪商たちの荘厳な商家が建ち並ぶ有松を経て、鳴海宿へ。地名からも分かるように、この辺りはかつて海に面していた。それが、平安時代頃から海が徐々に遠のき、干潟を形成していった。一帯の干潟が「鳴海潟」と呼ばれるようになったのは、鎌倉時代以降のことだそう。

安政4年(1857)創業の菊屋茂富で代々製している「鳴海潟」は、かつての鳴海の風景を打ち出した干菓子で、千鳥の意匠が施されている。鎌倉中期に阿仏尼が記した紀行日記『十六夜日記』にも、鳴海潟を歩いた際、たくさんの千鳥が先導してくれたとあり、また、永徳3年(1383年)の勅撰和歌集『新後拾遺』でも巖阿上人が「鳴海潟夕波千鳥立ちかへり友よひつきの浜に鳴く也」と詠んだ情景だ。



景だ。

今は海は遙か彼方、道先案内をしてくれる千鳥もいないが、風雅な干菓子で往時を偲ぶことができた。

短冊状の阿波和三盆糖の表面に、波と千鳥の模様が描かれている。

◆菊屋茂富

住所：愛知県名古屋市区鳴海町相原町28

電話：052-621-0130

お知らせ

▽編集会は、十二月十二日(第二日曜日)に発行所にて行う。

▽新年号原稿は、十二月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不要です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△平成二十二年十二月号の今日は編集会である。

猛暑という、ただただ暑い日が続き、秋の日というのも、またたく間に過ぎてゆきそうな気がする。

ついこの間まで庭道を彩っていた彼岸花も萩の花も、もうすっかり姿を替えてしまった。

何となく落ちつかない日が続く、短歌に向き合っているつもりでも、なかなか五七五七七のリズムが蘇ってこない。雑念ばかりにとらわれている自分を叱咤している此の頃である。

会員の皆様には、こんなことはないのでしょうか？。

早くこのこの状態から抜け出したい。抜け出せそうな気もしつつ。(小野)

△新年号に年賀広告を掲載します。二千円をお送り下さい。

△新年歌会を二月に予定しています。詳細は次号にてお知らせします。

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年十一月二十五日印刷 第五十七巻 第十二号
平成二十二年十二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘
平松 裕子・山口千恵子

発行人

今泉由利

発行所

三河アララギ発行所 〒四四二・〇三二一
豊川市御津町御馬西三七

URL

E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumiyun.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美